

# 害虫発生予察情報(3月予報)

平成 28 年 2 月 24 日  
静岡県病害虫防除所長

## 1. 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや多 (発病株率 1.1%)	2月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(±)
	灰色かび病	発生量：並 (発病株率 1.4%)	2月中旬発生量：やや少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(+)
	アブラムシ類	発生量：やや少 (寄生株率 1.3%)	2月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
	ハダニ類	発生量：やや多 (寄生株率 20.1%) 但し、中部は多	2月中旬発生量：やや多(+) (一部多) 気象予報：気温：高い(+)
	アザミウマ類	発生量：やや多 (寄生株率 8.3%)	2月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+)
トマト	灰色かび病	発生量：多 (発病株率 5.1%)	2月上中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(+)
	葉かび病 すすかび病	発生量：少 (発病株率 16.0%)	2月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(+)
	疫病	発生量：やや少 (発病株率 0.6%)	2月上中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：並～多い(+)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：多 (発病株率 2.6%) タバココナジラミ発生量：やや多 (寄生株率 2.2%)	2月上中旬発生量 黄化葉巻病：多(+) コナジラミ類：並(一部多) (±) 気象予報：気温：高い(+)
	ハモグリバエ類	発生量：少 (寄生株率 1.2%)	2月上中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い(+)
タマネギ	腐敗病	発生量：多 (発病株率 3.1%)	2月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(+)
	灰色腐敗病	発生量：多 (発病株率 0.1%)	2月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(+)
	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株率 60.0%)	2月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
チャ	赤焼病	発生量：やや少 (発病葉数 0.3 枚/1.25m <sup>2</sup> )	2月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気 温：高い(+) 降水量：並～多い(+)
	カンザワハダニ	発生量：並 但し、一部多 (摘採面寄生葉率 1.5%)	2月中旬発生量：並(±) 気象予報：気 温：高い(+) 降水量：並～多い(-)

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

## 2. 予報の根拠と防除対策

### 【イチゴ】

＜生育の概況＞

2月の生育状況は、並～やや早い。

#### うどんこ病

##### 予報の根拠

- ・2月の巡回調査では平均発病株率は1.1%（平成0.8%）と、概ね平成並の発生であった。
- ・1か月予報では、3月の気温は平成より高く、降水量は平成並～多いため、本病の発生をやや助長する。

##### 防除対策

- ・株の過繁茂は本病の発生を助長させるため、不要な下葉、果梗枝は除去する。
- ・初期発生に注意し、現在発病が少しでもみられるほ場では、早急に防除を行う。
- ・今後は果実での発生も多くなるので、発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

#### 灰色かび病

##### 予報の根拠

- ・2月の巡回調査では、平均発病株率0.5%（平成0.8%）と平成に比べやや少ない発生であった。
- ・1か月予報では、3月の気温は平成より高く、降水量は平成並～多いため、本病の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・天窓、側窓の開閉、かん水に十分注意し、ハウス内が多湿にならないようにする。
- ・枯葉、老化葉、不要な果梗枝、発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外で埋没処分する。

#### アブラムシ類

##### 予報の根拠

- ・2月の巡回調査では、平均寄生株率は0.4%（平成1.3%）で、平成に比べ少ない発生であった。
- ・1か月予報では3月の気温は平成より高く、本種の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・アブラムシ類の発生に注意し初期防除に努める。すでに発生しているほ場では、早急に防除する。
- ・天敵を利用している場合は、アブラムシ類のマミーの発生状況をよく観察する。アブラムシ類が多発した場合は、アブラムシ類とハダニ類の天敵に影響のない薬剤を選択し散布する。

#### ハダニ類

##### 予報の根拠

- ・2月の巡回調査では、平均寄生株率21.5%（平成17.1%）で平成に比べやや多い発生であった。ハダニ類の発生は、地域やほ場により大きく異なり、特に中部地域での発生が多かった（中部地域の平均寄生株率27.8%、中部地域の平成値19.3%）。
- ・1か月予報では、3月の気温は平成より高く、本種の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除を徹底する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、薬剤のローテーション散布を心がける。化学農薬の効果が低

い場合には、気門封鎖型薬剤も活用して防除する。

- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類、天敵の発生状況をよく観察し、天敵の追加放飼または薬剤散布をする。
- ・薬剤散布をする時は、ハダニ類とアブラムシ類の天敵に影響のない薬剤を選択する。

## アザミウマ類

### 予報の根拠

- ・2月の巡回調査では、平均寄生株 3.7%（平年 3.2%）で平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、3月の気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

### 防除対策

- ・アザミウマ類は花を好むため、花での発生をよく観察する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・例年多発生するほ場では、開花初期に農薬による連続散布を行う。
- ・ハダニ類とアブラムシ類の天敵を利用している場合は、天敵に影響のない薬剤を選択し散布する。

### <その他の病害虫>

## 炭疽病

2月の巡回調査では、平均発病株率は 1.7%（平年 0.4%）と平年より多い発生だった。本病は高温多湿を好み、開花・結実により株に負担がかかると発病しやすいため、栽培後半の3月以降発生が増加する。発病を認めた場合は、培土ごと発病株を抜き取り、ほ場外に持ち出し、土中深く埋めるなどして適切に処分する。

自家採苗においては、健全な親株を使用するとともに、炭疽病が発生したほ場には親株や苗を持ち込まないように注意する。

## 【トマト】

### <生育の概況>

生育は平年並。

## 灰色かび病

### 予報の根拠

- ・2月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は 9.9%（平年 4.0%）、発生面積率 50%（平年 38%）と平年より多い発生であり、発病が茎に及んでいる施設や、栽培を早期終了した施設も確認された。
- ・本病は特に多湿条件下で発生が多くなる。1か月予報では、3月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

### 防除対策

- ・株の繁茂やハウス内の湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ハウス外の土中深く（地下 50 cm以上）に埋めるなどして適切に処分する。
- ・朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生をいちじるしく助長する。そのため、暖房機利用や循環

扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

## 葉かび病、すすかび病

### 予報の根拠

- ・ 2月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は3.9%（平年17.5%）と平年より少ない発生であったが、一部施設では多発していた。
- ・ 本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる。本県では、12月以降は葉かび病が優先する傾向がある。
- ・ 1か月予報では、3月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。本県では葉かび病抵抗性品種の利用が進んでいるが、葉かび病抵抗性品種を使用していない施設では、特に発生に注意する。

### 防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・ 発病葉は伝染源となるため速やかに摘み取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

## 疫病

### 予報の根拠

- ・ 2月上中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.4%）。しかし、防除員からのアンケートでは、「やや多い」との回答が西部地域で得られている。
- ・ 1か月予報では、3月の気温は平年より高いが、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

### 防除対策

- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。
- ・ 株の繁茂やハウス内の湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ハウス外の土中深く（地下50 cm以上）に埋める等して適切に処分する。

## 黄化葉巻病（タバココナジラミ）

### 予報の根拠

- ・ 2月上中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は5.0%（平年2.4%）と平年より多い発生であった。
- ・ コナジラミ類は、一部施設で多発生していたため平均寄生株率は3.1%（平年2.3%）と平年より高くなったが、多くの施設では平年並の発生であった。
- ・ 1か月予報では3月の気温は平年より高く、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。

### 防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放

置しない。

- ・タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

#### ハモグリバエ類

##### 予報の根拠

- ・2月上中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率 1.9%）。
- ・1か月予報では3月の気温は平年より高く、本種の増殖を助長する。

##### 防除対策

- ・温度上昇とともに幼虫の発育期間が短くなるので、上中位葉に白点（産卵痕や摂食痕）や細かい絵描き症状（幼虫によるせん孔）を確認次第、早めに防除を実施する。

#### 【タマネギ】

##### <生育の概況>

全般的に高温多雨の天候が続いていることから、生育は平年に比べ7～10日進んでいる。

#### 腐敗病

##### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均発病株率 3.4%（平年 0.6%）と、平年より発生が多かった。
- ・1か月予報では、3月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いことから、本病の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・本病は風雨により感染・拡大するため、風雨の直前に薬剤散布を実施し、予防する。
- ・罹病株は、ほ場付近に放置すると発生源となるため、ほ場外に持ち出して処分する。

#### 灰色腐敗病

##### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では発生が認められなかった（平年発病株率 0.04%）。
- ・1か月予報では、3月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いことから本病の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・罹病株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

#### ネギアザミウマ

##### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 29.4%（平年 54.9%）と平年に比べ少なかった。
- ・1か月予報では、3月の気温は高いものの、降水量は平年並～多いことから、本種の増殖を特に助長しない。

##### 防除対策

- ・今後、気温が高まるに伴い増殖が盛んとなり、生息密度が高まる。しかし、収穫期を迎えているほ場では、特に防除の必要はない。中生品種など収穫までの期間に余裕があるほ場では発生に注意し、密度が高まる前に薬剤防除を実施する。
- ・株元の葉と葉の隙間に多く生息しているので、その部分に薬剤がかかるようにていねいに散布する。また、周辺の収穫期を迎えているほ場に薬液が飛散しないように、風の無い時に散布する。

## 【チャ】

### <生育の概況>

低温や寒風による寒害で葉に障害を受けている茶園が一部に見られる。

### 赤焼病

#### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、発生はみられなかった（平年発病葉数 0.06 枚/1.25m<sup>2</sup>）。
- ・1か月予報では、3月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いことから、本病の発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・発生が見られる茶園や常発茶園では、早めに薬剤による防除を行う。発生が広がるようであれば、20～30日後に追加防除を行う。
- ・本病は、強風雨などで障害を受けると発生が助長される。現在、発生が見られない茶園でも、これからの発生に注意し、発生が見られたら早めに防除する。

### カンザワハダニ

#### 予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、摘採面での寄生葉率は0.9%（平年0.9%）、裾部での寄生葉率は2.6%（平年3.0%）で平年並の発生程度であったが、発生面積率は摘採面36%（平年26%）、裾部62%（平年51%）で平年より高かった。

県内各地域の防除員等からは一部茶園における多発の報告がある。

- ・休眠調査の結果、越冬雌成虫は、2月中旬時点で74%が休眠から明けており、産卵を始めている。1か月予報では、3月の気温は高いことから、新幼虫の発生が平年に比べ早まることが予想され、現在寄生密度の高い園では防除が必要である。

#### 防除対策

- ・摘採面の葉に寄生が見られる茶園では早めに防除を行う。散布薬量は400リットル/10aを目安に、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・裾部の葉に寄生が見られる茶園では、発生に注意し、ハダニが摘採面に上がってくるようであれば早めに防除を行う。
- ・平年に比べ、気温・湿度が高い条件下では、天敵のカブリダニ類の活動が活発化し、ハダニの増殖を抑える働きが高まる。天敵が確認される茶園では、天敵への影響の少ない殺ダニ剤を選択し、天敵の保護を図る。

## <その他病害虫>

### チャトゲコナジラミ

チャトゲコナジラミの発生が確認されている茶園では、一番茶時期の成虫の発生を抑制するため越冬幼虫を対象に防除を行う。カンザワハダニとの同時防除を兼ねて、両種に適用のある薬剤を用いる。幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くようにていねいに散布する。

## 【イネ】

## <その他病害虫>

### いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシンガレセンチュウ

#### 防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・県病害虫防除基準に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

#### 育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・シルバーポリシートによる育苗では高温多湿になりやすいため、換気を行い温湿度管理に注意する。
- ・本県では、MBI-D剤（ウィン、デラウス、アチーブ）に対し、いもち病で耐性菌の発生事例がある。また、他県ではQoI剤（嵐、アミスター、オリブライト、イモチエース、イモチミン、オリザトップ）でも、いもち病で耐性菌の発生事例がある。これら耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料の掲載について」の項を参照）。

### スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

#### 防除対策

- ・昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・本種は低温に比較的弱いため、地表面の貝は1～2月に死亡する。しかし、土中の貝は生き残るため、3月中にロータリー耕を行い、越冬貝を粉砕する。ロータリー耕は細かく、また回数が多いほど効果が高い。
- ・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

## 3. 季節予報

(1) 1か月予報（東海地方 平成28年2月18日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 2月20日から3月19日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いです。



よう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	40	50
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	10	40	50
2週目	気温	20	40	40
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

- 1か月 : 2月20日(土)～3月19日(土)
- 1週目 : 2月20日(土)～2月26日(金)
- 2週目 : 2月27日(土)～3月4日(金)
- 3～4週目 : 3月5日(土)～3月18日(金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成28年2月24日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 3月から5月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

3月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多い見込みです。気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

4月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

5月 天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

【気温】

3か月			3月			4月			5月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	30	50	20	30	50	20	30	50	20	40	40

【降水量】

3か月			3月			4月			5月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
20	40	40	20	40	40	20	40	40	30	40	30

【参考資料】

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	3月	4月	5月	3月	4月	5月
浜松	9.7	14.7	18.7	149	168	191
静岡	10.3	14.9	18.8	217	210	213
三島	9.5	14.4	18.5	164	149	161

\*1981年～2010年の平均

\*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1よりも多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL <a href="http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html">http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html</a>
--

## 茶 カンザワハダニ

平成 28 年 2 月 24 日  
静岡県病虫害防除所長

県内各地域の茶園でカンザワハダニの多発生園が散見されます。  
新幼虫の発生が平年に比べ早まることが予想されるため、防除の徹底をお願いします。

### 1 発生状況

2月中旬の巡回調査では、摘採面の発生面積率は36%（平年26%）、裾部の発生面積率は62%（平年51%）で平年より高かった。

県内各地域の防除員等から一部茶園における多発の報告がある。

2月中旬の休眠調査の結果、越冬雌成虫は平坦地の大部分で休眠から明けており、産卵を始めている。

1か月予報では、3月の気温は高いことから、新幼虫の発生が平年に比べ早まることが予想される。

4月に凍霜害が発生すると、被害がさらに助長される可能性がある。

### 2 防除方法

- (1) 防除は発生の有無を確認し、摘採面での寄生葉率が10%（100葉観察調査）を超える前に行う。なお、多発茶園では、1回の防除では不十分な場合があるので、追加防除を行う。
- (2) 一番茶芽萌芽前（3月上中旬）の防除を実施する。散布薬量は400リットル/10aを目安に葉裏に薬液が届くよう丁寧に散布する。防除薬剤については表2を参考にするとともに、農薬の使用に当っては必ずラベルを確認し使用基準を遵守する。特に、昨秋防除した茶園では、薬剤の使用回数に十分注意する。
- (3) 平年より気温・湿度が高い条件下では、天敵のカブリダニ類の活動が活発化し、ハダニの増殖を抑える働きが高まる。天敵が確認される茶園では、天敵への影響の少ない殺ダニ剤を選択して使用する。
- (4) 不明な点は、病虫害防除所、茶業研究センター、農林事務所、農協等指導機関に問い合わせる。



図1 カンザワハダニ成虫

**表1 2月のカンザワハダニの発生状況**

地域名		摘採面発生面積率(%)	裾部発生面積率(%)
富士山麓	平均	40	30
	平年値	26	51
静岡市北部	平均	20	50
	平年値	28	41
牧之原	平均	60	100
	平年値	27	63
小笠・磐田原	平均	20	70
	平年値	21	50
川根地域	平均	40	60
	平年値	29	48
県全体	平均	36	62
	平年値	26	51

調査時期:平成 28 年 2 月 15~18 日

各地域 10 か所調査 平年値は過去 10 年間の平均値

**表2 茶におけるカンザワハダニの主な防除薬剤**

商品名	使用方法	希釈倍数・使用量	時期	回数	系統名
アグリメック	散布	1000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	マクロライド系殺虫剤
オマイト乳剤	散布	1500~2000 倍	摘採 14 日前まで	2 回以内	殺ダニ剤
カネマイトフロアブル	散布	1000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	殺ダニ剤
コテツフロアブル	散布	2000 倍	摘採 7 日前まで	2 回以内	その他の合成殺虫剤
スターマイトフロアブル	散布	2000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	殺ダニ剤
ダニゲッターフロアブル	散布	2000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	殺ダニ剤
ダニサラバフロアブル	散布	1000~2000 倍	摘採 7 日前まで	2 回以内	殺ダニ剤
パロックフロアブル	散布	1000~3000 倍	摘採 14 日前まで	1 回	殺ダニ剤
マイトコーネフロアブル	散布	1000 倍	摘採 14 日前まで (但し、遮光する栽培では遮光開始 14 日前まで)	1 回	殺ダニ剤
ミルベノック乳剤	散布	1000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	マクロライド系殺虫剤・ 殺ダニ剤
粘着くん液剤	散布	100 倍	摘採前日まで	-	天然物由来の殺虫剤

※農薬はラベルを確認し使用すること。

静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準 (<http://www.s-boujo.jp>) に掲載されている薬剤から抜粋 (平成 28 年 2 月 23 日時点 JPP-NET 配信データによる)

問い合わせ先：静岡県病虫害防除所（TEL：0538-36-1543）

病虫害防除所 HP（URL）：

<http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病虫害防除基準 HP（URL）：<http://www.s-boujo.jp/>